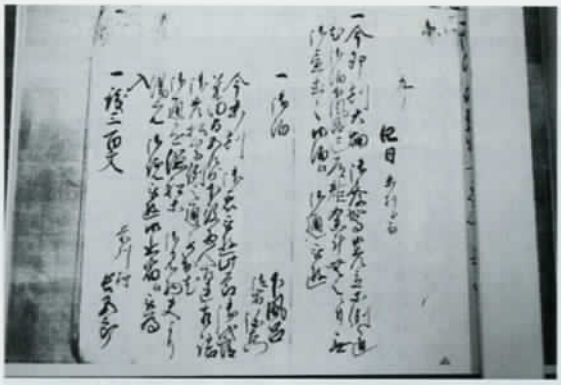
〈青森県史〉の窓 55

歴史に見る「温泉」②
藩主の湯治

中野渡 一耕
（県民生活文化課 県史編さんグループ 主幹）

前回に引き続き、下風呂温泉の話題を。下風呂には藩主の湯治に備えて「御仮屋」が置かれていた。盛岡藩主の湯治地は、盛岡に近い繋（現盛岡市）、鵜宿（雫石町）、台（花巻市）などが主であったが、元文4年（1739）8月に7代藩主の南部利視が下風呂を訪れた記録があるので紹介しよう（「殿様御忍ニ而田名部下風呂御湯治被遊候御用留」盛岡市中央公民館蔵）。



南部利視下風呂訪問の記事
（盛岡市中央公民館蔵）

「お忍び」としたのは公的な訪問にすると、警備の人員も増え、準備も煩雑になるからであるが、それでも随行者の総人数は160～170名にもなった。往復の行程や宿泊地、昼食地もあらかじめ決められ、藩主が宿舎に入るごとに盛岡に連絡の使者が派遣された。

盛岡城から下風呂までは250km近くあるが、まっすぐに下風呂を目指したのでなく、例えば三戸では南部利直（初代藩主）の霊屋や三戸八幡宮などを参詣したり、藩営牧場を視察したり、あちこちに立ち寄っている。代官所所在地を通るごとに、必ず代官の出迎えを受け、給人（代官所付の郷士）らを引見している。

8月21日に盛岡を出立、下風呂には9月4日に到着。14泊15日というのんびりとした行程であった。宿舎は弥四郎宅。まず漁船による漁の様子を見物している。内陸にある盛岡では気軽に漁も見られず、興をそそられたか、前日は大畑で、前々日には大平（現むつ市）でも漁を見物している。捕った魚は盛岡まで運ばせている。

さて、肝心の温泉はどうだったのか。はるばるやって来た割には、下風呂での宿泊はわずか一泊のみ。藩主訪問にあたり、「湯坪囲」の準備をし、藩主が湯元を見学したとあるものの、実際に入浴し、その感想を記した記述はない。

藩主はその後、大間を経由して佐井まで行き、マタギらを引見、熊やカモシカなどの献上を受けている。佐井は9月7日に出立、帰りも下風呂に1泊したが、特にこれと言った記事はない。帰路は、横浜から現在の六ヶ所村・三沢方面を通ったり鹿角や湯瀬を経由したりと行程を変え、盛岡に帰着したのは9月22日であった。

この利視の旅は「湯治」といいながら、肝心の湯に関する記録は少なく、温泉ファンとしては残念なのだが、湯治を名目にした領内視察であったと考えられる。思えば、利視の時代は外国船の出没もなく、まだ内外も比較的安定していた時期であった。幕末の安政3年（1856）には14代藩主南部利剛が下北地方を巡検しているが、台場の視察などが中心で、のんびり温泉に浸かる余裕も無かった。

ちなみに、弘前藩主の主な湯治地は浅虫や大鰐で、八戸藩では領内にこれといった温泉地が無いので、台温泉から温泉水を取り寄せて療養したという記録がある（藩主は南部広信。元文5年八戸藩日記）。温泉の「デリバリー」は昔からあったのである。

寛政12年（1800）の下風呂温泉
「大日本国東山道陸奥州駅路図」より
（青森県立図書館蔵）